

算数科における指導の重点(身に付けさせたい力) ※学習指導要領に照らし合わせて	
ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等
数量・図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解すること。	事象を数量・図形及びそれらの関係などに着目し、問題を捉えたり、考えたりして、自分の考えを表現し、伝え合うこと。

	児童・生徒の学力の状況(課題)	授業における具体的な手だて	手だての実施時期	成果検証(2月)
第1学年	・差や違いを求める計算を正確に計算することが難しい。ア ・問題文を正しく読み取れないために、正確に立式することが難しい。イ	・授業の冒頭の時間で、10の合成分解に慣れる時間を設け、計算力を養う。ア ・問題文の中の数字や大切な言葉に印を付けることにより、問題文の理解につなげる。イ	常時 毎単元	・10の合成、分解については、授業の始めや終わりに練習時間を設け、正確に計算できるようになってきた。 ・問題文のキーワードを線で囲むなど、求められているものを見つけることができるようになってきた。
第2学年	・長さや水のかさの単位換算が難しい。ア ・長さや水のかさの適する単位を選ぶための、量感が乏しい。ア ・問題文を正しく読み取れず、解決する見通しを立てることが難しい。イ	・単元の学習終了後も、宿題や日常的な課題として繰り返し指導を行う。ア ・身近にあるものを使用したり、予想を立てた上で、実際に測ったりして、量感を育てる。ア ・問題場面をイメージしやすくするために、文章内の聞かれていること、分かっていることなどの言葉にラインを引かせたり、キーワードとなる言葉を覚えさせたりする。イ	毎単元 毎単元 毎単元	・単位換算には、まだ課題が残る。引き続き繰り返し指導をする必要がある。 ・長さの、測定活動を繰り返したことで量感が少しずつついてきた。水のかさに関しては、授業だけでなく生活の中で身に付けていく必要がある。 ・キーワードとなる言葉を見付けたり、覚えたりすることで見通しを立てることはできたが、個人差が大きい。
第3学年	・文章問題の読み取りに課題があり、図や立式に表すことが難しい。ア ・図形の名称を正しく覚えていない。ア ・分数概念が理解できていない。ア	・問題場面をイメージしやすくするために、聞かれていること、分かっていることなどの言葉にラインを引かせる。ア ・視覚的な教材を活用して理解につなげる。ア ・単元終了後も、宿題や日常的な課題として繰り返し指導を行う。ア	・毎単元 ・常時 ・常時	・図を描いたり、言葉で説明したりして、文章問題を理解することができた。 ・三角形と角の時間に、図形の名称を確認したり、図形のプリントで練習したりして正しく覚えることができた。 ・宿題のプリント等で練習をし、分数概念を理解することができた。

	・自分の考えについて算数用語を使いながら、順序立てて説明することが難しい。イ	・発表の話型を決め、繰り返し指導し、定着を図る。イ	・常時	・算数用語を使い、問題の解法を説明することを毎時間行うことで、順序立てて説明することができた。
第4学年	・四則計算や単位の換算、数の概念などの既習事項の定着に課題がある。ア ・図形を正確にかくことが難しい児童が多い。ア ・数値や式を図や数直線で表すことが苦手な児童が多い。イ	・既習事項の練習を行う。ア ・丁寧に図形のかき方を指導し、繰り返し取り組ませ、技術を定着させる。ア ・デジタル教科書を使い、動画でかき方を具体的に见せる。ア ・学習を説明する時に、図や数直線を用いて、具体的事象と結び付けて考えることができるようにする。イ	・宿題、授業中、朝学習 ・単元 ・常時	・授業前や宿題で繰り返し練習したり、計算の仕方を視覚的に分かるものを使ったりすることで、計算することができる児童が増えた。 ・指導の中に視覚的な補助を入れることで、図形を描くことができるようになった児童が増えた。 ・数直線を描けるようになった児童は増えたが、それを用いて友達に伝えたり、友達の考えを読み取ることはできなかった。
第5学年	・わり算の計算を苦手としている児童が多い。ア ・文章から聞かれていることを見付けて答えることを苦手としている児童が多い。イ ・複合図形から解決できる形に変換して体積を出すことが苦手な児童が多い。イ	・東京ベーシックドリルを活用し、かけ算やわり算の筆算を復習する機会を設定する。ア ・文章中にアンダーラインやマークを付けることで、正しく立式できるように練習をする。イ ・複合図形を既習の図形に直すために補助線を必ず引かせる。イ	・毎単元 ・毎単元	・かけ算やわり算を復習したことで、できる児童が増えた。 ・アンダーラインやマークを付けることで立式できた児童もいる。 ・補助線を引いたことで、既習の図形を見出しやすくなった児童がいた。
第6学年	・四則計算、図形、数量に関する基礎的な知識・技能が定着していない児童が多い。ア ・新しい問題に対し、既習事項を元に解き方を考え、自分の力で答えを導きだすことが苦手な児童が多い。イ	・東京ベーシック・ドリルやアプリケーションの「ミライシード」を活用し、既習事項の定着を図る。ア ・関係性のある既習事項を導入で振り返り、問題に取り組む際に児童が活用しやすいようにする。イ	・毎週 ・毎単元	・基礎的な計算プリントを授業内で活用することで、計算が正確にできる児童が増えた。 ・既習事項を示し、関連性に気付かせることで、自分で答えを出すことができるようになった。

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人一台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
1・2年 タブレット端末を使って具体物を操作したり、課題などを分かりやすく確認したりできるようにする。【重点：個別】 3・4年 具体物の操作と ICT による視覚的な支援で理解しやすくなり、それを使って説明させたりする。【重点：個別】	1・2年 授業の導入で、既習事項や前時との違いなどを想起させたり、学習の最後に大切なことをノート等にまとめたりする。 3・4年 学習の振り返りの時間を設け、次時につながるキーワードや自己の課題をノート等にまとめる。 5年 本時の問題を解決するために、既習事項を活用する。めあてとまとめを囲む線を色分

5・6年 タブレット端末を使って個々の意見を表し、交流する。デジタル教科書を使い、個別に学びを深める。【重点：個別・協働】

6年 けすることで、学習を振り返りしやすくする。
小学校での学習のつながりと、中学校への接続を意識して取り組むようにする。